

街が、殺気だっていた。

橋詰海人は、店の前に乗りつけた七五〇ccからガードレールをまたぎこえ、フルフェイスのメットをはずした。

この街で生まれ、この街で育った。この街をよく知っているつもりだし、そのことを誇りにも思っていた。この街がもつ、幾つもの顔を眺め、好きになったことも、嫌いになったこともある。一生この街で暮らしていくのかと問われたら、考えるだろう。

だが、今すぐ出ていこうという気持もない。

この街は特別な街だった。海人にとつてそうであるように、意味はちがっても、海人と同じように特別な意識を抱く人間は、何千、何万人という筈だ。

海人は一八七センチの長身を傾け、交差点の方角を見やった。

九月。最後の金曜日。六本木。午後七時半。

アマンドの前は何十人という人間で埋めつくされている。信号がかわるのを待っているのではない。何かを眺めているわけでもない。

視線がとぶ。瞬きが交される。焼けた肌に白い歯が光る。叫び声。歓声。悲鳴。

ひしめきあう人の数は、一向に減らない。むしろ増えている。あとからあとから、地下鉄の階段をのぼってくる人々。

ネクタイ、スーツ、タイトスカート、タンクトップ、デザイナーズブランド、ジーンズ、アンクレット、そしてポアゾンの香り。

四十歳以上は、ほんのわずかしかない。十五歳以下と同じくらいか。

期待に目が輝いている。胸がふくらんでいる。わずかに汗ばみ、その体臭を吸いこんだ大気が欲望を刺激する。

いつもの光景だった。

だが何かがちがった。

毎日この街を訪れる者でなければ、そのちがいは気づかなかつたろう。

たとえば、デイスコのデイスカウントチケットを配るボーイたち。アマンドの前は人が多過ぎる。そこで、マイアミの前に彼らは陣どっている。第一陣がそこ、第二陣は交差点を渡ったブティックの手前だ。

そこがパブ・カードイナルでなくなったのはいつ頃だろう。海人がまだ小学生か中学生の頃だ。その少し右にピザのうまいイタリア料理店があった。名前は、確かラ・ストラダ。今は、ジャックアンドベティという名のカフェテリアになっている。

紫や黒の生地にスパンコールを散りばめた衣裳を着けたボーイたちは、確かに異変に気づいていた。

アベックや女連れのグループに、さつと歩みよつてはチケットを渡す。ときには店で知りあつた、顔馴染みの娘にも出会う。

——あら

——あれつ。最近ちつともきてくれないじゃないですか。皆んなで噂してたんですよ。美人がこなくてつまんないつて

——よくいうわよ

——試験だったんでしょ。もう終わったの？

——うん

——じゃあ、たまには顔見せて。フリーでいいから

——どうしようかな

——お願い

——じゃあ、あとで……

——本当だよ、約束だよ、待ってるからね

いつもなら、こんな話をあちこちで聞く。だが今日はちがう。

ボーイたちは、顔をうつむけがちにして、相手にさっと近づいてチケットを渡し、再びさっと離れる。

そしてときおり首をあげ、不安そうに、あたりを見まわしている。

あるいは、シャッターをおろした毛皮店やゴトウ花店の前で、絵やちゃちな細工物売る外国人。毎晩、七時頃に店を開け、朝の五時か六時頃まで、ガードレールに腰をおろし客を待っている。

それが、今、ひとりもない。

海人は理解した。違和感の最初は、ここにあった。いつもなら店の横で絵を売っている白人と黒人のコンビがない。

煙草センターの方を見た。安物のネックレスやブレスレットを売るイスラエル人もいない。今日はかきいれどきなのに。

消えた車とは反対に、増えている人間もいた。

まず、道を行く外国人の数だ。六本木は、確かに、日本中で一番外国人の多い盛り場だろう。

今ほど円がドルに強くなる前は、横須賀にアメリカ海軍の船が入った日は、六本木の人通りでそれと知れたものだ。クルーカットの田舎臭い若者が、どっとディスコにくりだしていた。

今でも、外国人の姿は多い。それもアメリカ人だけではない。アラブやヨーロッパ、東南アジアからやってきたビジネスマン、観光客、苦学生、詐欺師、強盗、娼婦、娼夫がこの街に金を落とし、この街から吸いあげている。

その数が、今夜は異様だった。街を行く人々の半数が外国人のように思える。言葉もさまざまだ。英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、広東語、海人にはどこともわからぬ言葉。

まるで日本ツアーがよその国からの海外旅行の人気ナンバーワンになったかのようなようだ。それとも、各国大使館員が、六本木視察にどつとくりだしたか。

と同時に、この街をふくれあがらせているもうひとつの人種がいた。

二重、三重駐車で、片側二車線、双方で四車線ある外苑東通りを片側通行にしまっているメルセデスの数がそれを示している。

濃紺、または白、あるいは黒の、磨きこんだボディにネオンを反射させ、遮光シールをウインドウ全面に貼りめぐらせている。交通の大渋滞をひきおこしていることを意にも介さず、堂々とハザードを点け、全車線を塞いでいるその数は、見てとれるだけで十数台にも上った。特に、ナンバーガーインの前がひどい。その区画だけが、メルセデス専用の駐車場になったかのような道。道を塞ぐそれらの車にクラクションを鳴らす人間は、ひとりもない。メルセデスとその駐車

の仕方が、持ち主の素姓を物語っているからだ。

だが不思議なことはもうひとつあった。それだけやくざが乗りつければ、必ず、運転手やボデイガードたちが暑苦しい車を降り、あたりを睥睨^{びげん}している筈なのに、今夜に限っては、誰も路上に立つてはいないのだ。

運転手たちは車に残り、ボデイガードはびったりとそれぞれの親分によりそって、建ちならぶビルのどこかに吸いこまれているのだ。所在なげに煙草を吹かしたり、横柄な視線を通行人にとばすチンピラの姿は、車道にも歩道にもなかった。

張りつめた何かがこの街にあった。

それに気づくことができるのは、この街で暮らしている人間だけだ。遊びにきて、通りすぎる者たちには、決して感じとることはできないだろう。

この街で糧^{かて}を得ている者だけが、蒸し暑い夜気にたちこめた鋭い緊張感を嗅いでいた。

海人はゆっくりと空気を吸いこんだ。

何かがおきつつある。それはわかった。

だが、何がおきようとしているのだ。盛り場でありがちな、単なる偶然が重なっただけなのか。

海人は、自分が入ろうとしている建物を見あげた。

六本木で最古の建物のひとつに数えられるだろう。このこと同じほど古いのは、向かいの毛糸店と、新装なった誠志堂書店の並びにある呉服店くらいのものだ。

「和菓子 はしづめ」と墨書で描かれた木の看板が二階の窓の下に掲げられている。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。